ごごみ日和

京都発！ごみ減量情報誌

vol. 94

すべては土から生まれ、土に還る　そして生命を育てる
土と野菜

走り出した「本気」の脱炭素とそこから生まれる好循環
株式会社島津製作所

繊維製品に廃棄以外の道を
en we cle（エン・ウィ・クル）

なごみ日和
「金継ぎ、はじめました」

もっぺん物語
「わくわくリサイクル　アールイー」

コーヒーで味わうエコの「醍醐」味！
HEROES COFFEE

ごみにまつわるこの数字なあに？

94%の人が持っている

答えは WEB へ！
※トップページ「よもやま話 ごみ減のごみ袋」をご覧ください。

表紙デザイン
嵯峨美術大学 デザイン学科 4年
稲堂丸 怜菜

京都市ごみ減量推進会議

特集

すべては土から生まれ、土に還る そして生命を育てる

土と野菜　店長　越田　祐未さん

書き込みがたくさんされている黒板と店長の越田さん

沖縄で生まれた株式会社FOOD REBORN（フードリボン）は、捨てるものがない未来を目指している。「土と野菜」は、フードリボンの商品や想いを発信する場として京都に誕生した。

農と食卓をつなげたい

土と野菜。その名の通り、土に焦点を当てたお店。土に始まり、また土に還る。この循環を大切にしている。

いま、農と食卓のつながりが見えにくくなっている。誰がどんな想いを持って野菜を育てているのか、その大切な想いは食卓まで届かない。

土と野菜では、農・料理・食卓を双方向で結んでいる。ここで提供される野菜は、農家から直接仕入れたもので、農家さん一人ひとりの顔が浮かぶ。真心こめて育てられた野菜をどのように料理しようか、と考えるとわくわくする。ここには、「育ててもらった野菜はこんな風に美味しく食べていますよ」と報告が出来るつながりがある。

土と野菜は、土からの恵みに感謝し、環境に優しい暮らし方を発信する場。そして、同じ想いを持った人が安心して繋がり、わくわくを共有できる場所。

店前の黒板と麻袋を活用したプランター

コーヒーの麻袋のプランターで緑化活動

昨年から、麻袋（ドンゴロス）の活用を模索している。コーヒーを輸送する為だけに使われ、一日に何千枚も捨てられている。「どうにか、活用できる方法はないか。」と京都のコーヒー製造会社、小川珈琲から相談を受けた。麻はもともと自然から生まれた物なので、土に還る。その性質を活かして、土に還るプランターが作れるのではないか、と試行錯誤が始まった。麻の繊維が分解される様子を見て、普段見えない土の力を感じて欲しい。分解され破れても、また新たな麻袋を上から被せるだけで、手間もかからない。ドンゴロスから作られた土に還るプランターで緑化活動を進めている。

更に、実証実験中の畑の防草シートとしての活用も、農家さんの反応が良い。10月に行われた畑の作業には、多くの学生ボランティアスタッフが参加した。農家さんから「これ持って帰り～」と野菜をもらい、後日美味しく食べている様子を報告した。このようなひとつひとつの繋がりも大切にしている。

麻袋を防草シートとして活用している

服育※で繊維の適切な分別を

修徳児童館で、「服育講座」を行った。服育では、繊維について学び、適切な分別が出来るようにすることを目標としている。資源ごみの分別は進んでいて、ペットボトルはラベルやキャップを外してから資源物として回収に出している人は多い。一方、服を繊維ごとに分別することはしていない。繊維についての知識があれば、適切な分別ができ、リサイクルなどの循環への道が拓けるのではないか。そんな願いを込めて服育講座を行い、店内には、天然繊維の回収ボックスを設置している。

店内の天然繊維の回収BOX

講座に参加した児童は、「（ポリエステルなどの）服は、洗濯するだけで（排水中）にマイクロプラスチックがでるの!?」と驚いていたそうだ。

適切な循環も大切だが、リデュースも同様に大切、と伝えている。安い値段で服を買える時代だからこそ、買う前には「本当に必要かどうか」を立ち止まって考える癖を付けたい。

修徳児童館での服育講座の様子

※服育…衣服の大切さやその力について理解し、暮らしに活かす力を養う取組（服育net研究所より）

みんなで解決するための MOAI（モアイ） プロジェクト

MOAIプロジェクトは、環境・社会課題解決に向け同じ想いを持つ人が手を取り合うためのチーム。このプロジェクトで生まれた商品の数々もお店に並んでいる。例えば、「一善はし」。国産の端材から割りばしを作り、使用後に炭化し、土壌改良材として循環させる取組だ。一膳が一善になればという願いが込められている。また、「奏-kanade」プロジェクトは、日本酒の魅力を伝えるだけでなく、リユース瓶を活用することでリユースシステムの価値を見直している。

お店のカウンターから見える黒板には、「情報募集」や「仲間募集」の文字が見える。これは、「同じ想いの人が集まれる場所」になるための工夫のひとつだ。“ほんの少し興味がある”だけでもいい。一歩勇気を出して集まれば、そこから繋がりが生まれる。少しずつではあるが、確実に輪が広がっているそうだ。

勝手に寄せ書きスペース！（黒板で紹介しているメッセージから抜粋）

・次の日本酒イベント思考中。「こんなイベントしてほしい」を教えて下さい！
・糠床交換会をしたいです。興味のある方いますか？
・日本茶好きな人、集まりませんか？
　もっと日本茶の魅力を発信したいのですが、一緒に考えてくれる人いませんか？
・おばんざいのレシピを教えてくれる人募集中！毎週一品持ち寄って、レシピの共有会したいです！
　興味のある方、店舗スタッフにお声がけを！

循環型社会を願う人の輪

環境に良いことをしてみたい、ちょっと興味がある、でも一人じゃ心細い。そんな人は是非、「土と野菜」を訪れて欲しい。人と人が繋がり、想いと想いがつながった時、物事は前に進むのかもしれない。1人の力では叶わない未来でも、ここで集まった仲間と情報や活力を寄せ合うことで叶うかもしれない。

今日からできることは、まず、考える癖をつけること。どんなことも問い続け、考え続けて欲しい。生きることは選択することだが、その価値観は千差万別だ。だからこそ確かな情報を持って考え続けたい。「土と野菜は、考えるきっかけとなる場にしていきたい。」と店長の越田さんは語った。

今後は、店内で野菜の販売も考えている。循環型社会を願う人の輪は、広がっていくだろう。

土と野菜
〒600-8499　京都市下京区四条通堀川西入ル唐津屋町521 プリンススマートイン京都四条大宮１F
TEL：050-3717-0141　URL https://tsuchitoyasai.co.jp/karitenpo/

岸　さゆり（2022年10月25日他取材）

環境経営統括室の三ツ松昭彦氏と前田綾氏

走り出した「本気」の脱炭素とそこから生まれる好循環

株式会社 島津製作所

京都が誇るグローバル企業、島津製作所。このコーナーで2015年の秋にもお話をご紹介しましたが※、その後の島津さんはどんな感じ？ サーキュラーエコノミーと脱炭素へ向かう、さまざまな動きがあるそうです。早速、環境経営統括室の三ツ松さん、前田さんにお話を伺いました。

※こごみ日和65号（2015/秋）／ホームページでバックナンバーをチェック！ https://kyoto-gomigen.jp/publications/15.html

廃プラスチックの自己循環

もとより環境意識が高く、CSRの一環で多くの取組を重ねてきた島津製作所。例えば社内で出た古紙をリサイクルし、社内で使うノートとして再利用する「自己循環」は長年の取組のひとつ。近年はプラスチックの自己循環を進めている。

2022年から、リサイクルプラスチックで作った「廃液容器」の利用がスタートした。研究所などで出る一部の廃液は下水に流すことができず、特殊な処理が義務付けられているため、容器に貯めておく必要がある。容器の使用量は年間1,200本ほど。これまではバージンプラスチック製の容器を仕入れていたが、自社の廃プラスチックをマテリアルリサイクルし、自社用に独自で作ることにしたという。

原料となるのは、おもに梱包材。部品や部材を梱包する、いわゆる「プチプチ」、荷崩れ防止のためにぐるぐる巻きにする「ラップ」のようなストレッチフィルムなど。柔らかいプラスチックから硬い容器へのリサイクルには困難もあったが、試行錯誤のすえ40%のリサイクルプラに60%のバージンプラを加えて、満足のゆくものが出来た。

「事業活動で使うプラスチックの減量を考えたときに、バージンプラを買う量を減らすこと、特にシングルユースのプラを減らすこと。まずはここからクリアしようと取り組んでいます」と三ツ松氏。環境には優しくとも、コストはかさむのかな…と思いきや、プラスチックの価格上昇の影響で、現時点ではむしろ「安く」抑えられたという。

廃液容器

そのほか、社内で利用するプラスチック製ごみ袋、感染性廃棄物のボックスも自社のリサイクルプラを原料にしている。また廃液容器については、自社にとどめるのではなく、他企業や大学に声をかけて、この枠組みを大きくしていこうと働きかけている。

リデュース（発生抑制）の観点では、自社工場間は「通い箱」を使う、荷崩れ防止にはストレッチフィルムではなく何度も使えるバンドに変更するなどの取組も実施されているが、包装資材の簡素化や代替化はこれからの課題だ。

3Rからサーキュラーエコノミーへ

さて、ここまで紹介してきたのは「廃棄物」の話。島津製作所は、さらにその先へ進もうとしている。すなわち、自らが送り出す製品の環境負荷を下げること。そして製品の資源循環のサイクルを確立することだ。

今年度、社内の部門を横断した「サステナブル素材普及委員会」が立ち上がり、製品の素材を見直す取組がスタート。リサイクル素材やバイオ素材をどう製品に導入していくかの検討が始まっている。

製品の長寿命化も重要課題と位置付けている。2022年3月には、強度試験に使用される試験機の制御装置のみを入れ替えることにより、古い試験機のアップグレードができるキットを発売。これにより製品ライフサイクル中のCO_2排出量を年間で60%以上削減することができる。

さらに、廃棄ではなく循環を前提とした製品の設計･製造に、トップダウンで号令がかかっているという。

「製品を循環させるためには、設計思想から変えていかないといけない。ゼロから考えて設計し、製品化し、それが私どものところに戻ってくるまでに20年くらいかかる。戻ってきたものを資源として､製品を生み出していく。先の長い話ですが、やっていかないといけない。今後の最大の課題のひとつです」。

トップダウンと現場の気づき

お話しを伺っていると、どうやら「環境経営統括室」がひっぱるだけでなく、それぞれの部門で、自発的に「環境」に取り組んでいる印象を受ける。その原動力はいかに生まれるのだろうか？

「まずトップの方針というところが大きい。それに加えて、取引先や世界の情勢を肌で感じて、社員の意識が上がってきているというのもあります。当社は売上の半分強が海外です。海外でビジネスしようとすると、さまざまな規制が新たにできていますから、本気で環境に、脱炭素に取り組んでいないと生き残っていけない、そういう危機感も強いです」。

ここ数年、京都府との取組でサプライチェーンの脱炭素化を進めており、取引先と意見交換する場が増えているという。世界的な流れで、サプライヤーに対する脱炭素の要請が今後さらに強まっていくことは間違いない。サプライチェーン全体の意識も上がっていくはず、と三ツ松氏は話す。

社員ひとり一人の意識にも変化が

2020年に環境省から「エコ・ファースト企業」に認定されたことを受けて、５つの約束を定め、社内外に公表している。社員ひとり一人の環境意識の向上も約束のひとつだ。

「押しつけになってはいけないのですが、仕事だけでなく、日常生活も含めて意識が上がっていくことを願って、社員への働きかけをしています」そう話してくれたのは前田氏。働きかけの一例としては、社員のエコな取組を社内限定のイントラネットで紹介している。具合的には、生ごみ堆肥、風呂敷の活用、農業体験といった楽しい取組が紹介された。それぞれ反響があり、動きが広がっていく様子も見られ「いい循環が生まれていると思います」と前田氏は笑顔だ。

生活と仕事は目には見えなくとも繋がっており、互いに影響を及ぼすもの。切り離すことはできない。島津製作所の環境への取組の先進性は、こういった働きかけにも下支えされているのかもしれない。廃棄物、製品、社員間、生活と仕事…。いくつもの好循環を感じる取材だった。

私たちのエコ・ファーストな生活宣言

エコバッグ不要論！？ ～ふろしきのススメ～

2020年のレジ袋有料化に伴い、エコバッグの購入が進み、エコバッグを常に鞄に入れている人が増えたのではないでしょうか。スーパーのレジで並んでいても多くの方がエコバッグを取り出し、レジ袋をもらわない光景は当たり前になりました。

そんな中、私は「風呂敷」の価値を再発見したことで、鞄には常に風呂敷を入れています。その3つの理由を紹介します。

理由その1：エコバッグ以上に賢い使で役に立つ

エコバッグはサイズが決まっていて、買う物の量によって、エコバッグを使い分けないといけません。しかし、風呂敷は大きなサイズ（1m～1m程度）を一つ持っておれば、小さいものから大きいものまで包み込むことができます。買い物かごに風呂敷をいれて、レジでそのまま商品を置せてもらい、会計後に結んで取っ手をかければ、かごから移し替える必要もありません。さらに、活用すると、エコバッグと同じように使うことができる、便利な道具（後述）もあります。

スーパーの会計後に活用すれば、結ぶだけでエコバッグに

お会計の際、明らかに品数が多くて入りきらないときは、風呂敷を使ってエコバッグに（※無料の袋が入っています。）

社内のイントラネットでは、社員の取組を紹介

株式会社 島津製作所 〒604-8511 京都市中京区西ノ京桑原町1
TEL：075-823-1113 https://www.shimadzu.co.jp/

佐藤 文絵（2022年10月21日取材）

Hand in Hand

繊維製品に廃棄以外の道を

2020年、日本の家庭から手放された衣服のリユース・リサイクル率は約34%と低く、ごみとして出された約50万tもの衣服が焼却・埋立処分されている※。更に、衣服の製造段階で発生する裁断くずなどの繊維廃棄物を含めると、膨大な量の繊維が廃棄され、その多くが循環されず環境に悪影響を与えている。こうした状況をふまえ、大学生と研究者らが繊維製品の廃棄から生じる環境負荷について考え共有する場として開催されたのが、「私たちのSDGs～繊維製品の循環を目指して～」である。本稿では、このイベントに参加した筆者が、活動の中で試行錯誤したこと、他学生らと交流して感じたことなどを報告する。

チーム「エン・ウィ・クル」始動！

イベントは、2022年９月２日～11日の10日間、なんばマルイ１階イベントスペースにて実施した。20社の協力企業から提供を受けた廃棄予定の繊維素材を使って、関西の６大学から参加した大学生約60名が、衣服、服飾雑貨、インテリア作品などのアップサイクル商品を自ら作り販売した。期間中には、学生主導のワークショップ、企業によるポスター展示、学生の司会進行によるゲスト講演者のSDGs関連トークショーなどを実施した。実行委員の先生方と大学生らは「en we cle（エン・ウィ・クル）」というチームを結成し、開催当日までイベントの実現に向けて何度も打合せを重ね、準備を進めた。

廃棄予定の繊維素材で物作り

企業から提供頂いた廃棄予定の繊維素材は、古着、カーテン、古着を再生した布地、織物の房耳（みみ）、魚網（ぎょもう）、靴下の製造工程で発生する端材など、多種多様。素材を受け取った私は同じ大学の参加メンバーと話し合い、カラフルで可愛い房耳を使用してバッグを制作することにした。日常の中で誰かの目に留まり、関心が広がり、衣類の廃棄に対する意識を変えていきたいと考えたからだ。

織物の房耳を編んだ布地からできあがったバッグ

バッグの制作では、まず紐状になった房耳を編むことで平面の布地を作った。しかし、それだけでは編み目の形状が不安定で、バッグの布地として使用できない状態だった。そこで、編んだ房耳の上からミシンで叩き縫いをすることにより、布地としての強度を加えることに成功した。袋の形に縫い、持ち手を付けてバッグの形になった時は嬉しく、感動した。房耳の様な特殊な形状の素材から思いも寄らないものが出来上がる！そこに面白さを感じた。

個性あふれる制作品

イベント会場に並ぶ学生が制作したアイテムはどれも個性に溢れ、可愛くユニークなものばかりであった。なかでも滋賀県立大学の学生が網目を花の形に結んで制作した魚網のベストは、ディスプレイを見たお客様が「これは何？」と興味を持つことが会話のきっかけになっていた。実際に着てみたら、斬新なアイデアに驚くに違いない。

会場の様子

破棄される魚網をベストに

10日間のイベントは盛況で、会場は連日、人や商品との出会い、学びとときめきに満ちていた。このイベントに参加して、廃棄される繊維素材も皆のアイデアで救うことができることを実感した。大学間の垣根を越え集結した今回のエン・ウィ・クルの取組が、繊維製品へ意識を向け、廃棄を見直すきっかけになっていればとても嬉しく思う。

※環境省「SUSTAINABLE FASHION これからのファッションを持続可能に」を参照
https://www.env.go.jp/policy/sustainable_fashion/

●「私たちのSDGs～繊維製品の循環を目指して～」の詳細は、下記をご覧ください。
京都光華女子大学キャリア形成学部
https://www.koka.ac.jp/career/news/7036/

風戸　菫（京都光華女子大学キャリア形成学部）

なごみ日和

KBS 京都 アナウンサー
海平（うみひら）　和（なごみ）

第36回　「金継ぎ、はじめました」

この度、新しい趣味が増えました。ずっと気になっていた金継ぎ。金継ぎとは陶器などの割れや欠け、ひびなどを修復する日本の伝統的な修復技法ですが、その割れている部分を接着しているのは主に漆。金や銀は最後に施す装飾なので、「漆継ぎ」と呼ぶ方が正しいのかもしれませんね。

今年（2022年）９月に京都市内に初の実店舗をオープンした「POJ Studio」。日本の伝統や工芸品を取り入れたライフスタイルを提案する体験型の空間です。取材に伺ったことがきっかけで、そのアトリエスペースで行われている金継ぎ体験に。古くは縄文時代にまでさかのぼるという漆を用いた修復は、100％天然素材で行われます。時間と手間はかかりますが、目の前の器と向き合い、漆をつけた筆を動かしていると、まるでその器と会話しているかのような不思議な空気が流れます。また、修理することで長く使えるというだけでなく、自分の手で修復した器は、愛着がわき、以前より特別なものにさえ感じられます。高価なものでなくても、金継ぎで修復したものは世界で１つだけ、自分だけのものになるんですもん。さらに驚いたのは、漆は100年後が一番強度が高くなるということです。自分の手で、もう一度命をふきこんだ大切な器は、100年先に今より丈夫で、しかも安心安全な素材のままで在り続ける。そう考えると金継ぎって、なんてロマンチックで優しいの？と、すっかりその魅力に惹き込まれてしまいました。これから、私「金継ぎ、続けます」。

海平　和：京都市出身、2010 年 KBS 京都入社。テレビ「京 biz」、ラジオ「ファミリーレストランと海平和のめちゃうま」などに出演。

人と物と。織りなす「もっぺん」物語　第23回

要らないものを欲しい人へ「わくわくリサイクル アールイー」

伏見区醍醐に本店を構えるアールイーは、京都市内を中心に出張買取をしてくれるので、不要品が大量にある、処分を急ぐという時に嬉しいリユースショップ。店の前身ともいえるのが、“軽トラック巡回による不用品回収”。代表の吉田央さんが、友人の始めた回収業を手伝いながら「まだ使えるものも多いのに廃棄するのはもったいない」と思ったことが店舗を構え中古品販売をするきっかけとなった。

扱う商品は、電化製品、パソコン、カメラ、楽器、衣料、食器、ブランド品…と幅広いが、中でも冷蔵庫、洗濯機、液晶テレビなど生活家電の充実ぶりには目を見張る。回収した品は、簡単な補修・清掃を行い、ピカピカに磨き上げて店に出すので、「新品みたい」と言われることもしばしば。「価格や品揃えも負けないぞ！という気概でやってます」と胸を張る。

「子どもの頃から機械ものを分解して中を見るのが好きだった」という代表の吉田央さん

家電を中心に生活に密着した製品が並ぶ店内。実店舗のほか、ネット販売、海外輸出など、販路を広く持っているので扱う品のジャンルも幅広い

引取り希望が多いのが健康器具。「通販の影響か、健康器具が多いんです。しかもあまり使われていない。買う前に本当に必要なものかを考えて買ってもらえたら…」と吉田さん。健康器具はあまり売れないので、数が増えると「ご自由にどうぞ」と店先に出すという。「100円でも売れないが、タダなら引取り手がある。宣伝広告費と考えています」と。100円と０円の差を日々実感しているからだろうか。「タダでいいから引取って」と言われることも多いが、多少傷や汚れのある品でも修復可能、商品になると判断すれば、せめて10円でも100円でも値をつけて買取るようにしているのだとか。

家に眠らせている不要品。もったいないと感じたら、アールイーさんの手を借りて地域で循環させてはいかがだろう。

▶わくわくリサイクル　アールイー
〒601-1362　京都市伏見区醍醐池田町10 Le Reve 1F　TEL：075-200-4424　営業時間10:00～19:00
定休日　水曜日　HP：https://www.re-kyoto.net/

藤原幸子（2022年11月4日取材）

地域活動レポート ～HEROES COFFEE～

コーヒーで味わうエコの「醍醐」味！

伏見区醍醐にある「HEROES COFFEE」は、フェアトレードや産地貢献に寄与する「スペシャリティー」なコーヒーを扱うコーヒーショップです。世界中から集められた20種類以上のコーヒー豆を購入できるだけでなく、ウッディで落ち着いた店内でマスターこだわりのコーヒーを美味しく味わうこともできます。

店主の広田一雄さん

「コーヒーは、一つ一つ個性がある生鮮食品。焙煎したてのコーヒーは、フルーティーなものやチョコレートのようなものまで、まるで香りの魔法です」と語るのは、店主の広田一雄さん。

素材メーカーに勤めた後、「人と交わることがしたい」と2017年にこの地でコーヒーショップを始め、最近では、コーヒー産地の負荷の軽減だけでなく、環境負荷の軽減にも積極的に取り組んでいます。

そのひとつが、「カーボンニュートラルコーヒー」。温室効果ガスの排出量と吸収量の均衡を、コーヒーの提供時にも実現しようというのです。具体的には、まずコーヒーの生産や輸入・国内輸送時に排出されるCO_2を、「京（きょう）-VER（バー）」（京都府の実施する排出権取引制度）での排出権購入により相殺します。それだけでなく、お店で使用する電力を再生可能エネルギー100%にすることで、焙煎時にもCO_2が出ないようにしています。

ヨシストローと「カーボンニュートラル」コーヒー

「再生可能エネルギーの導入をきっかけに、より環境負荷の少ないコーヒーの提供ができないか考えるようになりましたね」と広田さん。

次に取り組んだのは、コーヒーの提供に伴って出る「使い捨て容器」の削減でした。マイボトルでコーヒーをテイクアウトした方や、豆を買う際に「マイ豆袋」を持参した方がいるごとに、ごみ減量活動を行うNPO法人「地域環境デザイン研究所 ecotone（エコトーン）」に寄付をしています。マイ容器の持参という行動をごみ減量活動支援につなげることで、お客さんにより積極的に環境保全に「参加した」という意識が生まれる、と広田さんはいいます。

その他にも、海外からコーヒー生豆を輸入した際に出る麻袋をエコバッグや傘にアップサイクルし、販売も開始。2022年３月には、社会課題の解決を目指す企業に対する認証「ソーシャル企業認証制度※」（通称：S認証）も取得しました。さらに同年10月からは、お店で提供するストローを、繰り返し使用できる「琵琶湖のヨシ」製にしました。「素材メーカーに勤務していた頃は、消費者が使い捨て容器で買い物すればするほど大量生産する仕組みの中で働いていましたが、同時にとても疑問に思っていました。今は、容器の削減や再利用を可能にすればするほどムダも削減でき、お客さんに還元できることを実感しています」と広田さんは話します。

「HEROES COFFEE」という名前は、デビッド・ボウイの曲「HEROES」が由来。そこには「僕たちはヒーローになれる、一日だけなら」という歌詞が。ヒーローズコーヒーのコーヒーを飲むことで、私たちも一杯ぶん、地球環境を守るヒーローになれるのかもしれません。

広田さんの想いに共鳴し、キッチンカーでSDGsを広める学生団体「＝Scafe（イコールエスカフェ）」を運営する中岡優人さん。広田さんのコーヒーも提供している。

山田　大地（2022年10月18日取材）

※2021年４月より、一般社団法人 ソーシャル企業認証機構が運用している評価・認証制度

・HEROES COFFEE（ヒーローズコーヒー）
〒601-1364　京都市伏見区醍醐江奈志町10-111
TEL：075-205-1509　営業時間　10:30～20:00　定休日 月曜日
HP　https://www.heroes-coffee.jp/

・「=S cafe」Instagram

『わたしのごみ減らし術』 ▶使い捨てないラップのアイデア。身近なもので手軽にごみ削減

ご飯の残りものが出たとき、器にラップをかけて保存していませんか？ラップを一回使っただけで捨てるのは勿体無い！そんな時は家にあるお皿がラップの代わりに使えます。器の上にお皿を被せておけば、乾燥を防ぐことができ、そのまま冷蔵保存や電子レンジで温め直すことも可能です。お皿の他には、お鍋の蓋や蓋付き容器もおすすめです。　（左京区・Ｓさん）

編集・発行／京都市ごみ減量推進会議　普及啓発部会（事務局 公益財団法人 京都市環境保全活動推進協会 地域環境活動促進室 ごみ減量担当）
〒612-0031 京都市伏見区深草池ノ内町13 京エコロジーセンター活動支援室内 TEL:075-647-3444/FAX:075-641-2971 E-mail: gomigen@kyoto-gomigen.jp URL: https://kyoto-gomigen.jp/

ごみ減　検索 で検索できます
植物油インキで印刷しています。
この印刷物が不要になれば「雑がみ」として古紙回収等へ！